

Check

第3章 検証



それぞれの活動によって生まれた成果は
検証することで次への糧になると
寺本達也所長は言う

この3つの検討チームが進めた「まちづくり実践」は
地域に、地域住民に、どんな成果・効果をもたらしたのだろうか



大井川電力センター
寺本達也 所長

地域の電力事情を担う中部電力㈱大井川電力センターの
所長。「継続的成長」が信条。「必要なのは続けながら経
験を積み重ねること」と語る。まちづくり有志の会「こ
んばんわ会」に所属しながら、さまざまな活動に励む。

他人ごとではなく、どれだけ「自分のこと」として考えられるか
やれない理由ばかり考えていては、前に進むことはできない
共に活動を続けることで、意識の変化も現れ始めている

まずは危機感を持つこと

私たちが地元の皆さんに提
案を持ちかけた当初、話し合
いの中で「危機感のなさ」の
ようなものを感じました。
「お客さんが減って困ってい
る」と言うけれど、どこか他
人ごとのような印象を受けた
んです。落ちない大石を活用
した提案もいまいち反応が薄
くて…。最初は、なかなか話
し合いが進みませんでした。

そんな折、「駿河湾沖地震」
があったんです。本町では震
度4を記録し、寸又峡ではプ
ロムナードコースの法面が崩
壊。一時、通行止めになりま
した。この温泉郷の目玉であ
る「夢の吊り橋」に行けなく
なってしまうんです。する
と、どういことが起こった
か。キャンセルするお客さん
が多数出始めたんです。そこ
で、地元の人たちが気付いた
んです。「観光の目玉が『吊

り橋』だけじゃダメだ。何か
あったら大きな打撃を受け
しまう」と危機感を募らせた
んです。これが大きかった。
地元の皆さんが腰を上げる
きっかけになりました。そこ
からは意見交換する中で、多
くのアイデアが生まれました
きつと、地元の人たちは元々
いろんなアイデアを持って
いたんです。ただ、一歩踏み出
すチャンスがなかっただけな
んです。

で、全部いつべんにやろう
とするから、それではダメだ
と。少しずつ小出しに取り組
んで、1年ごと確認しながら
続けましょうと投げかけまし
た。結果を見たくて早急に全
部をやらうとすると、確かに
その時は盛り上がりますが、
後が続かないんです。うま
く成功すれば万々歳ですが、
失敗したときの落胆も激しい
その後「もういいや」と弱気
になってしまうようでは意味
がないんです。
井川線にしても寸又峡にし
てもそうですが、一つのもの
が完成したら「それで終わり」
じゃありません。できあがり
た後のことを考えなければ。
どう次につなげていくか。そ
れを見越して一つずつ取り組
むことが必要なんです。
まちづくりとは、つまりは
そういう努力の積み重ねな
んです。

地域との一体感を忘れず

各検討チームには地元の職
員もいれば、転勤してきた職
員、一度町外に出て戻ってきた
職員など、多様な顔ぶれが
そろっています。地元にいる
と気が付かないことでも、こ
のメンバーだから気が付くこ
とも多い。一人では限界があ
ることでも、いろんな人が関
われればできるかもしれない。
だからこそそのチームなんです。
そんなメンバーたちに、私
がいつも話すのは「地域との
一体感を忘れない」というこ
と。仕事も生活も、ここが私
たちの地域、私たちの町なん
です。だからこそ他人ごとで
はなく、どれだけ「自分のこ
と」として考えられるかが大
事なんです。
チームが合同でディスカッ
ションすることもあります。
寸又峡チームのメンバーが本
町・井川地区チームに意見を
述べることも当然あります。
互いに意見を述べ合うことで
刺激を受けるし、思いもしな
かったことに気付かされるこ
ともあります。個別のチーム
だけで考えていては生まれな
いアイデアも、違う視点と出
合えば生まれる可能性があり
ます。いずれは、チーム同士
で共同企画した活動なんかも
生まれるかもしれません。

やれない理由を考えない

喫煙者がタバコをやめると
き、自分の心の中だけで「や
める」と思っている、なか
なか踏ん切りがつかないもの。

でも誰かに「やめる」とはつ
きり話してしまえば、それが
自分へのプレッシャーになり
やめることができるという話
を良く聞きます。これと似た
ことが、まちづくりにもいえ
るのではないのでしょうか。
まず「夢（大きな目標）」を
持ち、公言する。それを出発
点にして、じゃあ今の自分に
何ができるのかを考える。
言った以上は「何か始めな
きゃ」って、良い意味で自分
が追い込まれるんです。
夢を叶えるために、小さく
てもいいから、まずは「やつ
てみる」ことです。始める前

から「やれない理由」ばかり
考えていたら、何も前には進
みませんから。
意識の変化が見え始めた

実際、寸又峡もそうでした。
投げかけをしても、最初は「や
れたらいいねえ…」という感
じで。おせじにも前向きな姿
勢には見えませんでした。そ
れがこの2年、一緒に活動す
る中で「意識の変化」が現れ
てきたようなんです。
寸又峡の奥の方に広場があ
るんですが、そこにピオトー
プを作ろうという話が出て。
実際に取り組みが始まってい
ます。これは、こちらから投
げかけた案ではなく、地元の
皆さんが自ら発案し、行動に
移した事例なんです。私も刺
激を受けました。

これからが楽しみな活動が
たくさんあります。決してす
べての取り組みが実を結ぶと
は限りませんが、最初から結
果を求めちゃダメ。みんな
一緒に取り組んで、悩んで、
5、10年の長いスパンで考え
ていく。考え続けることで次
へとつながっていきます。
自ら動かこうとする意識の中
で、また新しいアイデアが
きつと生まれてきます。

ピオトープ…生き物 (bio) がすむ場所 (topos) という造語。生物が存在できる環境
条件を備えた地域。都市化した土地に野生生物を呼び戻そうという動きから生まれた。

駿河湾沖地震…21年8月11日発生、御前崎市の北東35キロ沖の駿河湾海底を
震源とする地震。県内に大きな被害をおよぼした。本町は震度4を記録した。